

翻刻 「人間椅子」 草稿

〈解題〉

大正十二年に「二銭銅貨」で登場した江戸川乱歩は、大正十四年に入ると雑誌「新青年」に次々と作品を発表していく。大正十三年の末には大阪毎日新聞の広告部を辞めており、専業作家として歩み始めていた。この時期の作品は「D坂の殺人事件」「心理試験」「屋根裏の散歩者」など、乱歩の代表作となっているものも多い。

大正十四年七月、川口松太郎の編集するプラトン社の雑誌「苦楽」に、「夢遊病者彦彦太郎の死」(のち「夢遊病者の死」と改題)を載せる。続いて書かれたのが「人間椅子」で、これが九月号に掲載される。

発表された「人間椅子」は、外交官を夫にもつ女性作家のもとに、原稿束が届けられるところから始まる。夫人が原稿を読むと、そこには家具職人の男の告白が書かれていた。男は人間が内部に入りこむことのできる椅子を作成し

たという。その椅子はホテルのラウンジに置かれ、男はそこで盗みを働くのだが、椅子を通した触感を味わうことに快楽をおぼえるようになる。椅子は一般家庭に買い取られ、男はその夫人に恋愛感情を抱いてしまったという。つまり、それが夫人の座っている椅子なのだ。しかし、続いて届いた手紙を開封すると、そこにはその原稿が、小説であったことが明かされていた。

のちに乱歩がこの作品のアイデアについて、このように書いている。「夏のこと、二階の部屋で、籐椅子に凭れて、目の前に置かれたもう一つの椅子を睨んで、そして、口の中で椅子、椅子とくりかえしているうちに、ふと、椅子の形と人間のしゃがんだ形とが似ているなど思い、大きな肘掛椅子なら人間がはいれる、応接間の椅子の中に人間がひそんでいて、その上に男や女が腰をかけたら、怖いだろうな、という風に考えて行っただけです」(『探偵小説四十年』)。そして、横溝正史と一緒に神戸の家具店を訪れ、「この椅子の中へ人間が隠れられるでしょうか」と質問までしているのである。

さて、今回紹介する草稿は、A4サイズの原稿用紙六枚に黒(あるいはセピア)のインクで書かれたもので、半分

に折って右上をこよりで閉じてある。前号で紹介した「D坂の殺人事件」草稿と同様、「EXTRAORDINARY」と書かれた大型封筒に入れて保存されていた資料のひとつである。

この草稿一枚目の右欄外に「人間椅子の最初の草稿」とあり、まだ作品としてさほど固まった状態ではない段階のものであることがわかる。

「人間椅子」という作品の中心となるトリックはふたつある。ひとつは人間が椅子のなかに入り込むという仕掛けで、乱歩の回想を信じるならこれが先に存在して作品が構想されたことになる。

もうひとつのトリックは、夫人のもとに送られた原稿が、椅子の中にひそんでいた男の現実の告白として読まれ、のちに結末でそれが小説の原稿であったことが明かされる、というものである。

草稿を見ると、このふたつめの語りのトリックは、おそらくこの段階では構想されていなかったのではないかと思われる。夫人が作家であるという設定がまだ登場しておらず、その前提がなくては、原稿を読むということの必然性が存在しないからである。

草稿と完成稿の違いを考えると、夫人の造形がまず目に

つく。草稿段階の敏子夫人は、代議士の夫人ということになっており、「もう四十の坂を越した、謂はゞ、老夫人」のうちの一人である。一方、完成稿で桂子夫人の夫の職業は「外務省書記官」で、夫人自身も閨秀作家として名声を得てもある。そして「若く美しい」。

また、完成稿の夫人の性格がほとんど出ていないのに対して、草稿の方では、限られた枚数の中でも、その社交性や使用人に苛立ちを感じるような態度などが描かれており、これ以降が書かれていれば、完成稿のような単におびえる存在としてではなく、何らかの積極的な行動があったのではないかと想像させる。

帰宅した夫人が発見する、洋館の開け放たれた窓とカーテンは、椅子にひそんでいた男が外へ出た痕跡と考えることができるだろう。開いた窓を見て厳しく使用人を叱責しようとする夫人の様子から考えると、彼女に対する男の恋愛感情が展開されていくという可能性は低い。とすると、初稿では存在しなかった恋愛感情が、完成稿へと至る過程で組み込まれていったと言えるのではないか。

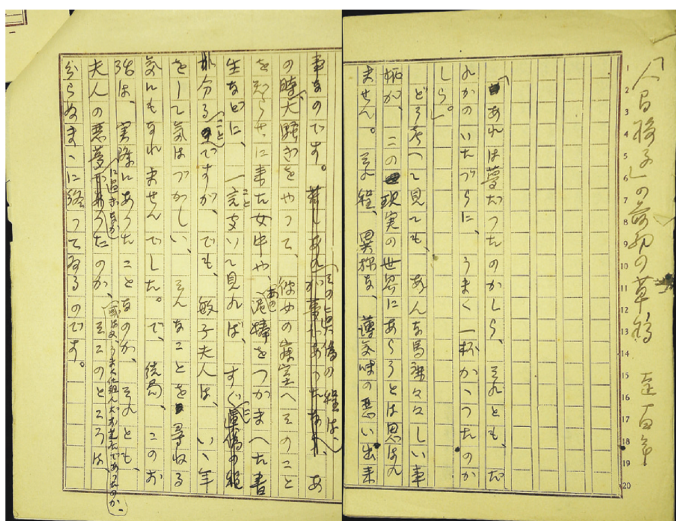
人間椅子という作品のなかで最も重要な、椅子を通した触覚の描写も、まだこの草稿段階では登場してはいない。

それを描くためには、椅子の中の男の一人称へとたどり着かなければならず、そのための仕掛けを導入しなければならぬが、それへとつながる記述もまだ書かれていない。

わずか六枚ほどの草稿であるので、ここに書かれていないものについて、この段階で構想されていないと言い切ることは、もちろんできない。だが、完成稿と比較することで、ある着想が、「人間椅子」という作品へと向かって私たちを整えていく、その端緒をここに見ることができるとではないかと思う。

（落合教幸 立教大学大学院博士後期課程・立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター勤務）





「」抹消部分
 一 挿入部分
 ■ 塗り潰し部分
 □ 判読保留

「人間椅子」の最初の草稿 大正十四年

「あれは夢だったのかしら、それとも、だれかのいたづらに、うまく一杯か、つたのかしら。」

どう考へて見ても、あんな馬鹿々々しい事柄が、この現実の世界にあらうとは思はれません。それ程、異様な、薄気味の悪い出来

事なのです。「若しあれが夢であつたなら」その真偽の程は、あの時、大騒ぎをやつて、彼女の寝室へそのことを知らせに来た女中や、あの一泥棒をつかまへた書生などに、一言聞いて見れば、すぐ「真偽の程が」分ることですが、でも、敏子夫人は、い、年をして気はづかしい、そんなことを尋ねる気にもなれませんでした。で、結局、このお話は、実際にあつたことなのか、それとも、夫人の悪夢「であ」に過ぎなかつたのか、「或は又、うまく仕組んだお芝居であつたのか、」そのところは、分らぬまゝ、に終つてゐるのです。

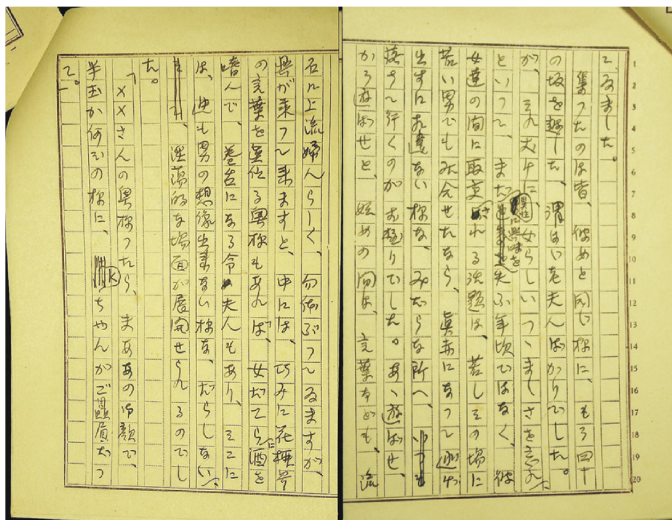


1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20

社交好きの、ある晩春の、夜更けのことでした。社交好きの敏子夫人は、帳度その頃、代議士の主人が、同じ仲間の人々と、「満」視察といふ名目で、満鮮地方へ遊びに出掛ける留守を幸、毎晩の様に、今日は何々会の相談会だとか、「今」一明二日は何々夫人の晩餐会だとか、いづれは閑に困つてゐる人達の、贅沢な遊戯に過ぎないのですけれど、それを、しかつめらしく社交と称へて、彼女達上流婦人たるもの、余儀ない勤めでもあるかの如く、家を外に「出

歩いて」一して一ゐるのでしたが、その夜も、彼女とは最も仲よしの、ある男爵夫人の晩餐会に呼ばれ、一夜の歓を尽して、敏子夫人が邸に帰つたのは、もう十二時に近い時分でした。

一彼女は、道すがら、一近頃■夫に勧めて、買ひ替へさせた、独逸タイムラアの、自慢の自動車の、深々としたクツシヨンに、ゆつたりと凭れ■一懸一つて、今の先別れを告げて来た、男爵邸の、きらびやかな食堂と、そこに集つた六人の、夫々に恥しからぬ夫を持つた夫人達の面影とを、思浮べ

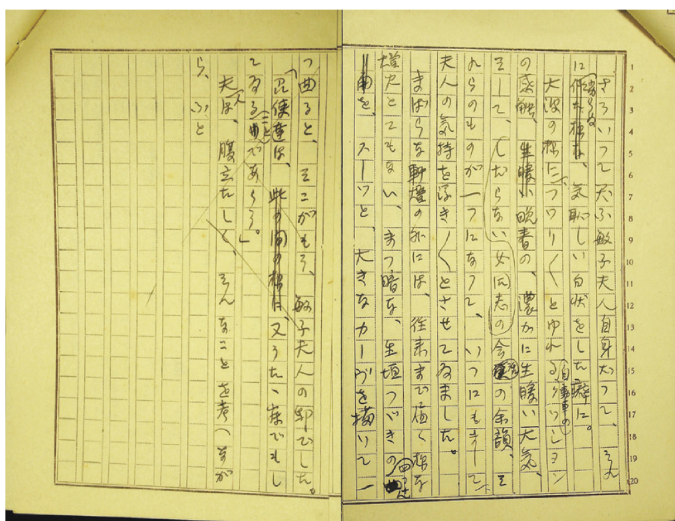


てゐました。

集つたのは皆、彼女と同じ様に、もう四十の坂を越した、謂はゞ老夫人はかりでした。が、それ丈けに、女らしいつゝ、ましさを忘れ、といつて、まだ「色気を」異性に興味を一失ふ年頃でなく、彼女達の間に取交「さ」れる話題は、若しその場に若い男でも居合せたなら、眞赤になつて逃げ出すに相違ない様な、みだらな所へ、「いつも」落ちて行くのがお極りでした。あ、遊ばせ、かう遊ばせと、始めの間は、言葉なども、流

石に上流婦人らしく、勿体ぶつてゐますが、興が乗つて来ますと、中には、巧みに花柳界の言葉を真似る奥様もあれば、女だてら一に「酒を嗜んで、巻舌になる令婦人もあり、そこには、逆も男の想像出来ない様な、だらしない、「そして、」淫蕩的な場面が展開せられるのです。

「××さんの奥様つたら、まああの御顔で、半玉か何ぞの様に、「けい」「K」ちゃんがご最良だつて。」



さういつて笑ふ敏子夫人自身だつて、それに「似た様な」
「劣らぬ」、気恥しい、白状をした癖に。

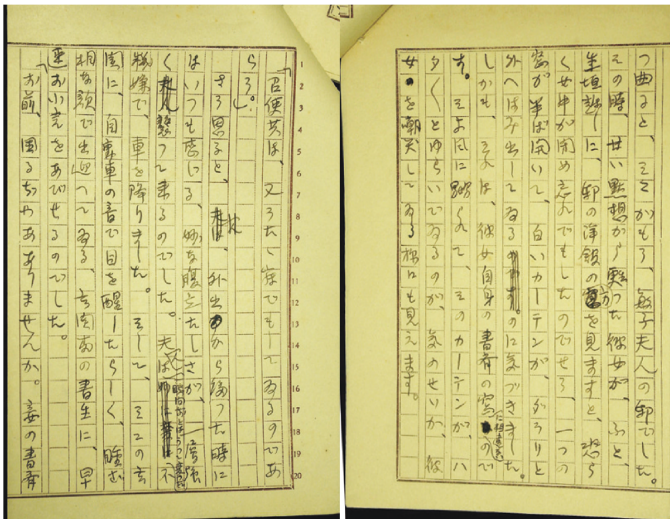
大波の様に、フワリくとゆれる「自動車の一クツシヨ
ンの感触、「生暖い」晩春の、濃かに生暖い大気、そして、
女同志のくだらない会話の余韻、それらのものが一つに
なつて、いつにもまして、夫人の気持を浮きくとさせて
りました。

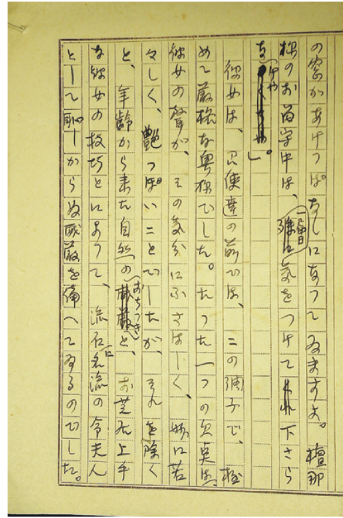
まばらな軒燈の外には、往來まで届く様な燈火とてもな
い、まつ暗な、生垣つゞきの「四つ辻」「曲り角」を、スー
ツと、大きなカーヴを描いて一

つ曲ると、そこがもう、敏子夫人の邸でした。

「召使達は、「此の間の様に、」又うた、寝でもしてゐる
「の」「こと」であらう。」

夫一人は、腹立たしく、そんなことを考へながら、ふ
と





の窓があけつばなしになつてゐますよ。檀那樣のお留守中は、「殊に」一一層 気をつけて「くれ」下さらな「くちや」「けや」。

彼女は、召使達の前では、この調子で、極めて厳格な奥様でした。たつた一つの欠点は、彼女の聲が、その気分にふさはしく、妙に若々しく、艶つぽいことでしたが、それを除くと、年齢から来た自然の「威厳」―おちつき―と、お芝居上手な彼女の技巧とによつて、流石「一」名流の令夫人として恥しからぬ威厳を備へてゐるのでした。

投稿規程

- 一、投稿に資格制限はありません。
- 二、テーマは大衆文化に関するもの。
- 三、枚数は四〇〇字詰め原稿用紙換算で、二〇枚程度。
- 四、採否は編集委員会で決定します。
- 五、投稿は随時受け付けていますので、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター宛てにお送り下さい。なお原稿はお返ししません。